

ヨブの友人たちの苦難に対する神学

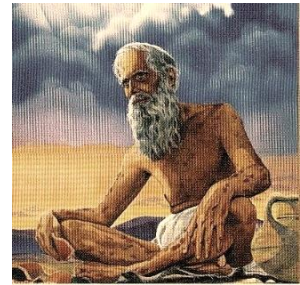
「ヨブ記」からの説教 No.3

【聖書箇所】 3章1節～11章20節



ベレーシート

●ヨブ記の本論は3章から始まります。ヨブの友人たちは、ヨブのあまりに深い悲しみを目の当たりにして、衣を引き裂き、ちりをかぶって、全く沈黙して座り込んでしまっていました。このまま沈黙が続いたとしたら、ヨブ記は書かれることはなかったでしょう。この沈黙を最初に破ったのはヨブ自身でした。



聖書は「その後、ヨブは口を開いて、自分の生まれた日をのろった。」と記しています(3:1)。神に向かってでもなく、また人に向かってでもなく「私の生まれた日は滅びうせよ。」と、独り言のように、ヨブの口から「のろい」のことばが出てきたのです。

●1章、2章での「のろう」ということばは、「祝福する」ということばの婉曲語法としての「のろう」でしたが、ここ3章では「カーラル」(קָלַל)の強意形ピエル態が用いられて「のろう」という意味になります。「カーラル」は、本来、「軽んじられる」「速い」という意味ですが、それが「のろう」という意味とどうつながるのでしょうか。それは、ヨブの心にあった苦々しい思いが、何ら制御されることなく、軽率にも、つい口から愚痴となって出てしまったということかもしれません。もしそうだとすると、ヨブの心の内から出た真実なことばとして耳を傾ける必要があります。しかし三人の友人は違っていました。ヨブの口から出たことばに誘発されて、三人それぞれが苦難の意味について語りはじめます。それは4章からはじまって31章まで、ヨブとの対論という形で記されています。

●対論の中で、ヨブは繰り返し、繰り返し、神に「なぜ」(Why)「どうして」(What)と問いかけます。原文では以下の三つの問いかけの語彙が使われています。

- ①「マー」(מָה)・・・581回中、ヨブ記は54回。これは最も多い使用頻度数です。ちなみに、詩篇は49回です。
- ②「ラーンマー」(לָמָּה)・・・178回中、ヨブ記は9回。
- ③「マッドウーア」(מַדּוּעַ)・・・72回中、ヨブ記は6回。

もし、「なぜ」と問うこと自体が間違っているとすれば、ヨブ記が記されることはなかったかもしれません。

●ヨブは3章25節で、「私の最も恐れたものが、私を襲い、私のおびえたものが、私の身にふりかかったからだ。」と述べています。これはどういうことかといえば、死を望んでも死ぬことができず、理由もなく、苦しみながら生きることを余儀なくされている状態のことを意味しています。そして、神がそれに対して完全な沈黙を保っているということです。それゆえヨブは「私には安らぎもなく、休みもなく、いこいもなく、心はかき乱されている。」とうめいているのです。生も死も、自分の意志によって操作ができないという神の絶対的主権という枠の中でヨブは苦しんでいます。なぜなら、彼のいのち(ネフェシュ)は神のものだからです。1章、2章で、神がサタンにヨブの信仰をふるいにかけることは許しても、ヨブの「いのち」(「ネフェシュ」נֶפֶשׁ)そのものに

はふれることを禁じているという背景があることを忘れてはなりません。そうした舞台設定の中でヨブ記は展開されているのです。4章以降、ヨブの友人たちは、自分が潔白であると主張するヨブに対して、次々と苦難に対する自分たちの神学(見解)を披歴していきます。ある意味で、彼らの存在はきわめて不可欠です。なぜなら、彼らの登場によって苦難という問題が深められるからです。

1. エリファズの苦難に対する神学(4~5章)

【新改訳改訂第3版】ヨブ記5章27節(5章最後の節)

さあ、私たちが調べ上げたことはこのとおりだ。これを聞き、あなた自身でこれを知れ。

【口語訳】

見よ、われわれの尋ねきわめた所はこのとおりだ。あなたはこれを聞いて、みずから知るがよい。

【新共同訳】

見よ、これが我らの究めたところ。これこそ確かだ。よく聞いて、悟るがよい。

●「さあ」、あるいは、「見よ」と訳されている「ヒンネー」(הִנֵּנָה)は注意を喚起させる言葉です。ここはエリファズ(אֵלִיפַז)の弁論の結びの部分です。下線の部分には「ハーカル」(חָקַר)という動詞が使われています。「探す、調べる、徹底的に調べて見つけ出す、捜し出す」という意味があります。エリファズは自分自身が神に求め(5:8の「ダーラシュ」צָרַק)得た答えだけでなく、「私たちが」と述べていることから、おそらく、三人の友人の共通見解とも言えますし、他の多くの者たちを含めた「苦難について」の総合的見解とも言えます。つまり4~5章で、これが苦難についての「きわめつき」的見解だとエリファズは自信をもって語ったのです。それゆえに、このことをよく聞いて、よく悟るようにとヨブに諭しているのです。エリファズの言う苦難についての「きわめつき」的見解とは何でしょうか。二つの事が取り上げられています。ひとつは、「因果応報的苦難」の理解です。もうひとつは、「神の愛に基づく教育的訓練的苦難」の理解です。

(1) 「因果応報的苦難」の理解

●「結果には必ずそれに至った原因がある」という考え方は真理です。今日の自己啓発といわれるセミナーでは、現在の自分の納得できない姿をもたらした原因を究明し、それを修正し、改善することによって、別の結果(多くは幸福、繁栄、成功)をもたらそうとしています。「原因があって結果がある」という見解は、聖書の真理でもあります。例えば、「ひとりの人(アダム)によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がった」(ローマ5:12)という言及も「原因と結果の法則」です。それゆえ、神は第二のアダム(イエシュア)の従順によってすべての人々にいのちを与えるという神のご計画にも同じ法則が存在します。エリファズは、ヨブ記4章7~8節で次のように述べています。

【新改訳改訂第3版】ヨブ記4章7~8節

7 さあ思い出せ。だれか罪がないのに滅びた者があるか。どこに正しい人で絶たれた者があるか。

8 私の見るところでは、不幸を耕し、害毒を蒔く者が、それを刈り取るのだ。

●ここには自分が蒔いた種は自分が刈り取るという因果応報の法則があります。決して間違ったことを述べているわけではないのです。以下のヨブ記 5 章 6～7 節も、同様に、「苦難」の原因がヨブ自身の中にあることを示唆することばです。

【新改訳改訂第3版】ヨブ記 5 章 6～7 節

6 なぜなら、不幸はちりから出て来ず、苦しみは土から芽を出さないからだ。

7 人は生まれると苦しみに会う。火花が上に飛ぶように。

(2) 「神の愛に基づく教育的訓練的苦難」の理解

【新改訳改訂第3版】ヨブ記 5 章 17～18 節

17 ああ、幸いなことよ。神に責められるその人は、だから全能者の懲らしめをないがしろにしてはならない。

18 神は傷つけるが、それを包み、打ち砕くが、その手でいやしてくださるからだ。

●上記には、苦難に対するもうひとつの考え方があります。それは神の父性的な訓練としての苦しみです。これは因果応報説とも関連しています。というのは、ヨブの側に神の懲らしめ(訓練)を受けるべき何らかの罪があるということが前提となっているからです。矯正的な懲らしめをないがしろにしてはならない。その背後には霊的な父の愛があるからだということです。このような見解は、聖書全体(旧約、新約)を通して存在します。

●たとえば、イスラエルの民が経験した 40 年間の荒野の放浪生活、70 年間のバビロンへの捕囚の経験がその例です。詩篇 119 篇に「苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。しかし今は、あなたのことばを守ります。苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。」(67 節、71 節)とあります。ここに記されている苦しみこそ、まさに、神の父性的な愛の訓練の良い例です。新約では、ヘブル人への手紙 12 章 5～12 節に、愛する子に対する父の訓練としての「懲らしめ」と「むち」があることを教えています。このように、苦しみには明白な意味と目的があるのです。

●使徒パウロが、ローマ人への手紙 5 章の中で述べていることも神の教育的訓練としての苦しみです。

【新改訳改訂第3版】ローマ人への手紙 5 章 2～5 節

2 またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。

3 そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、

4 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。

5 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

●「患難さえも喜ぶ」ことができるのは、患難の意味と目的が明白だからです。使徒パウロは他の使徒以上に多くの奥義を啓示された人であり、第三の天にまで引き上げられるという特別な経験をした人です。しかし、彼には「肉体のとげ」と言われるものがありました。彼はそれを取り去ってくれるように神に三度も祈りましたが、その祈りは聞かれませんでした。なぜなら、そのとげはパウロが高ぶることのないようにという神の愛の配慮が

あったからです。苦しみの原因や目的を知ることで、その苦しみがかなりの程度、軽減されることが多いのではないかと思います。ダビデも、彼が王となる前にサウル王から不条理な苦しみを与えられ、荒野を放浪することを余儀なくされました。しかしそのことで、ダビデは王となるためにふさわしい訓練を神から受けていたのです。

●それゆえ私たちは、ヨブに対して語られたエリファズの言葉を軽く考えてはならないのです。なぜなら、私たちの多くの悩みは「なぜ、苦難が自分の身に起こるのか」という解決の光を求めているからです。伝統的な因果応報の考え方も、神の愛に基づく教育的訓練の考え方も、明らかに聖書が教えている真理です。このことをしっかりと学ぶことがなければ、私たちは苦難に対して勝利することができません。苦難の原因と目的を聖書を通して客観的に学ぶことで、やがてたとえ自分の身にそれが降りかかった時に、冷静に判断することができるからです。あるいは、現実が変わらずとも、苦しみが軽減されることがあるからです。

●ところがです。このことについては、気をつける必要があるのです。

もう28年近く前になりますが、東京の御茶ノ水で女性向けの講演会があり、私と妻はその講演会に出席しました。講師はクリスチャンで、当時、大阪淀川キリスト教病院の精神科医であられた柏木哲夫師。「心をつめて」と題する講演でした。柏木医師は次のようなことを指摘しておられました。私たちクリスチャンは物事を往々にして性急に意味づけてしまいやすい。例えば、「これは神さまが、きっと、・・・しようとして、・・・のことをされたんだね。」とか、「これが神のみこころかもしれない。」というふうに、病院を訪れるクリスチャンの患者の多くは、このように信仰的な意味づけをすることで、逆に心の病をいやしくしてくしていると言うのです。なぜ、出来事の意味づけをすることが心の病をいやしくしてくしているかといえば、それはその人が感情があるがままに表出せずに、病を納得して受け入れ、良い子になってしまっているからなのです。苦しさの感情があるがままに表出されることなく、理性と感情の相克が生じてしまうためなのです。

●ヨブの友人たちも、ヨブを慰めようと思ってやって来てはいたのですが、ヨブの口から軽率にも愚痴が出たことで、彼らはヨブに起こった出来事の意味づけと目的を諭そうとしたのです。しかしそれはヨブの心を慰めることにはならず、かえって苦しめる結果となったのです。それは彼らがヨブのありのままの苦しみを受けとめることなく、苦しみの意味と目的を諭そうとしたからなのです。

●そのことを踏まえつつも、再度、ヨブ記5章17～18節の「17 ああ、幸いなことよ。神に責められるその人は。だから全能者の懲らしめをないがしろにしてはならない。18 神は傷つけるが、それを包み、打ち砕くが、その手でいやしてくださるからだ。」ということばに戻ってみると、やはり、これはこれで大きな慰めが与えられることばです。「全能者の懲らしめ」(「ムーサール・シャツダイ」 מוֹסֵר שַׁטַּיִם)は、「傷つけるが、それを包み、打ち砕くが、その手でいやしてくださる。」というすばらしい愛であり、信仰をもって受けとめるべきことが聖書のいろいろな箇所でも語られています。申命記32:39、Iサムエル2:6～7、ホセア書6:1・・・etc.参照。

●ちなみに、「全能者」の「シャツダイ」の「シャド」(שָׁד)は「乳ぶさ」を意味する名詞です。幼子のすべての必要を与えることができることを意味します。しかし、一方の「ムーサール」は、「さとす、懲らしめる、矯正する」という意味の動詞「ヤーサル」(יָסַר)で、そして、「わきへそれる、ほかの方へ行く、離れる」という意味の動詞「スール」(סָר)と語根が同じで、いわば親類関係にある語彙です。つまり、神の訓練や懲らしめが、同時に、神の愛から離れてしまう危機ともなりうるということの意味しています。なぜでしょうか。それは柏木医師が言われるように、苦しみの中にいる者が素直に自分の感情を表わし、それが受容されることがない時にある主の危機に陥るということです。自分の感情を素直に表わすことができるためには、それをありのままに受けとめ

てくれる人がいなければなりません。みんな良い子になって、自分に起こった出来事を意味づけることによって、その人の感情が表出されなくなってしまう懸念があるのです。

●もうひとつ、因果応報の考え方とは別に、エリファズの態度で扱っておかなければならない重要なことがあります。それは、エリファズが4章8節で「**私の見るところでは**」と言っていることです。個人の経験を普遍的な考え方の根拠とすることは、私たちがしばしば陥りやすい過ちです。自分の経験としては真実であったとしても、それがそのまますべての人に当てはまるとは限りません。自分の経験を基準にして他人の問題を押し量ることは誤りであり、決してしてはならないことです。むしろ、耳を傾けてあげるか、ただ黙って寄り添ってあげることが必要だということです。そのことを常に念頭に置く必要があると思います。

2. ビルダデの苦難に対する神学

●ヨブが経験した「苦悩」は、内的苦悩と外的災いをしてヨブに激しいうめき声をあげさせたのですが、重要なことはヨブにこの声をもたらしした原因です。エリファズの言う苦難の原因は「ヨブの罪」だとしていますが、ヨブが主張する苦難の原因は「神によるもの」だとして、エリファズとは決定的に異なっています。

●苦難の原因が「神によるもの」だということを、ヨブは次のように表現しています。

【新改訳改訂第3版】ヨブ記6章4節

「全能者の矢が私に刺さり、私のたましいがその毒を飲み、神の脅かしが私に備えられている。」

ここでヨブが語っていることは「神が毒矢を通して自分を(直接的に)脅かしている」ということです。つまり、罪の当然の結果としてではなく、直接に、神の毒矢が自分に刺さっているとしています。とすれば、「なぜ、この自分に」ということがヨブの苦悶するところなのです。それに対して、ヨブの友人ビルダデが立ち上がります。

(1) 「応報思想、正統主義、教条主義的苦難」の理解

●ビルダデ(בִּלְדָּד)は、ヨブに対して「あなたが口にする事ばは、激しい風のようにだ」と断罪しています。なぜなら、彼に言わせれば、神の統治の原理は常に明白で、常に正しく、常に変わらないと考えているからです。特に、神の公義(「ミシュパート」מִשְׁפָּט)と義(「ツエデク」צְדָקָה)において神の統治の基準は不変だとしています。「神は公義を曲げるだろうか。全能者は義を曲げるだろうか。」と訴えています。ビルダデの神学は正統主義であり、教条主義であり、応報思想です。その内容は勸善懲悪の教えであって、善と悪を教える上で重要な考え方です。そこから導き出される結論は、ヨブの息子や娘たちが災難にあって死んだのは、彼らが神に対してなんらかの罪を犯したからだということです。

●イエシュアの弟子たちもこうした考え方をもっていました。ヨハネの福音書9章で、生まれつきの盲人を見た弟子たちはイエシュアに質問します。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」と。するとイエシュアは、この質問に対して「この人が罪を犯したのではなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。」と語られました。おそらく、このイエシュアの答えは弟子たちを驚かせたに違いありません。ヨハネの福音書において「神のわざ(単数)が現れる」とは、イエシュアが神から遣わされたメシアであることを信じるようになること、あるいは、そのことを証する者となることを意味します。「神のわざ(単数)が現れるため」とは当時の正統主義的見解とは全く異なる、苦難に対する新

しい考え方です。

(2) 「伝統的な苦難」の理解

●ビルダデの正統的な神学は「応報思想」ですが、それは彼個人の独断的な考え方ではなく、先輩先人から受け継いだものであり、伝統的な知恵に負うものだとしています。「さあ、先代の人に尋ねよ。その先祖たちの探求したことを確かめよ」(8節)とヨブに語りかけます。「尋ねよ」は「シャーアル」(לַשְׂאֵל)の命令形、「確かめよ」は「クーン」(קוּן)の命令形です。そうすれば自分の言っていることが理解できるはずだとしています。

●伝統主義は、神の基準となる公正と義が人間的な概念(人間が造りだした律法)に微妙にすり替えられていくとき、それは人を苦しめる基準ともなり得るのです。その例が先のヨハネ9章です。いやされた生まれつきの盲人がパリサイ人とのやり取りの中で、「おまえはまったく罪の中に生まれていながら、私たちを教えるのか」と言われただけでなく、外に追い出されてしまいます。伝統主義は律法主義と密接に結び付きます。それゆえ、神の基準から離れていく危険があります。それゆえ、私たちは自分の考え方が、人から来たものか、神から来たものかを常に吟味する必要があるのです。

3. ツォファルの苦難に対する神学

●11章では、ヨブの友人の三人目である「ツォファル」(צֹפָר)が登場します。4節でツォファルは、ヨブに対して、ヨブの語っていることを要約して、「私の主張は純粋だ。あなたの目にもきよい。」と語っています。それに対するツォファルの苦難に対する神学が語られます。

(1) 神の知恵の奥義の深さを人は見抜くことはできない

●ツォファルは「さあ、考えを改め、主に向かって手をのべよ。」(バルバロ訳)とヨブに悔い改めをうながします。つまり、どんなに自分が潔白で、純粋で、きよいと言ったとしても、神はその深い知恵をもって罪ある者を見分けることができ、決してそれを見逃すはずがない方である。ヨブはそのことを知らないだけであり、もし、考えを改めて神に立ち返れば、神はその罪を赦してくださるので、「あなたの一生は真昼よりも輝き、暗くても、それは朝のようになる」と説得します。

●他の二人の友人と異なる点は、苦難の意味や目的には直接触れずに、自分は潔白だとするヨブに対して、神の知恵の奥義をあなたは知っていないと突き付けています。神は人間の不信実や悪意に気づかないような方でないということを諭そうとします。他の二人の友人との共通点は、ヨブのうちに罪があるという前提で語っているということです。

(2) ツォファルの弁論は、キリストの十字架の福音そのもの

●ツォファルの語っていることは、これまで福音的な教会が語ってきたメッセージそのものです。伝道説教において、キリストの十字架の福音を伝えることを重視してきたキリスト教会では、「神・罪・救い」という骨格なしに福音を語ることはできません。キリストの身代わりの十字架による罪の赦しの福音には、人間が罪人であるという認識(認罪)がどうしても必要なのです。罪の意識とその痛み、あるいは、その罪の恐ろしさに目が開かれることなくして、十字架の福音は全く意味をもたなくなるからです。それゆえ、真の希望は自分が神の前に罪

人であることを認めて(あるいは、信じて)、キリストの身代わりの十字架の福音を信じることで、罪は赦され、神との新しいかかわりがスタートします。このかかわりの祝福が、ツォファルに言わせると「あなたの一生は真昼よりも輝き、暗くても、それは朝のようになる」ということになります。さらに、神による救いの「望みがある」ので、あなたは安らぎ、あなたは守られて、安らかに休む。」とたたみかけます。

●ちなみに、ツォファルの言う「悪者ども」の定義は、「自分の罪を認めず、悔い改めない人間」のことです。その者には逃れ場(避け所)はなく、たとえ、望みを持っていたとしても、それは「あえぐ息に等しい」、つまり「はかないもの」だと語っています。福音的な教会で生まれ育った者にとっては、ツォファルの弁論はとてもしばらしいメッセージとして聞こえるはずですが。

おわりに

●ヨブの三人の友人とヨブとの対論はひとまず一巡しました。このあともさらに第二回、第三回と対論は進んでいきますが、ヨブ記の場合、一筋縄の見解では解決できない問題をはらんでいます。二筋縄、三筋縄の世界が展開されていきます。友人たちの苦難に対する神学は、表現こそ違い、内容的には同じものであり、応報思想がその土台にあります。彼らにとっては、苦難と罪とは切っても切り離せない関係にあるのです。

●これまでの議論を見ると、ヨブは自分の潔白さを主張し、友人たちはヨブのあら捜しをし、欠点を見つけ出そうとしています。友人たちとヨブは、これからのちの対論を通してなんらかの相互理解(あるいは見解の合意、和解)に、果たして到達することができるのでしょうか。



2014.6.1